遠藤 毅・中山俊雄・川島真一：東京における試錐コアから産出したオノミチキサンゴについて

Takeshi ENDO, Toshio NAKAYAMA and Shinichi KAWASHIMA : Discovery of Fossil
Dendrophyllia cribrosa (de Haan) from Drilling Core in Tokyo

(1971 年 10 月 18 日 受理)

1. ま え が き

東京都は地盤沈下調査事業の一環として、西部の山岳地帯を除く都内全域にわたり、試錐（深さ 300～1000m）による地質・土質調査と観測井による地下水位調査を計画し、現在実施中であるが、それらのうち昭和 45 年（1970）足立区宮城二丁目（第 1 図）にて施工した試錐コアからオノミチキサンゴの化石の産出をみたので紹介する。

2. 試錐結果の概要

試錐深度は 450m で、ダブルコアチューブを使用した。礫および粗砂層を除き大半をコアの状態で観察することができた。地質柱状図（第 2 図）に示したように深さ 20m までが有楽町層、深さ 20～29m が七号地層、深さ 29～54m が東京層に相当すると思われる。つぎに江戸川層群と上総層群の境界であるが、この両層群の境界設定も今回の調査目的の 1 つであるため層相調査のほかに花粉・珪藻・有孔虫分析、重鉍物分析を実施した。

層相からみると、深さ 150m までは粘性土・砂礫層が発達しているが、その深さをこえると砂層の発達が顕著になる。深さ 300m 付近からは砂の粒径が細くなり、

極微細砂から砂質泥岩へと変化している。また、今回の調査で注目すべきことは、深さ 50m から孔底にいたるまではほぼ全層にわたり浮石粒が認められたことである。

このような層相から判断すると、両層群の境界は深さ 300m 付近かと思われる。しかし、微化石分析結果によると、有孔虫は深さ 226m 付近を境に種の組合せが著しく異なり、また花粉によると深さ 200m 付近をこえると *Metasequia*, *Nissa*, *Liquidambar* の産出をみるようになる。

第 1 図 試錐地点

第 2 図 地質柱状図

第3図 コアから産出したオノミチキサンゴ

る。このように微化石分析結果による両層群の境界は深さ 220m 付近である。

3. サンゴの産出とその意義

サンゴの産出箇所は2つあり、1つは深さ 214m の細砂層中、他の1つは深さ 219m の砂礫層中で両者共同一種である。前者は皿円状であるが、後者は写真(第3図)でみるようにビットによる切断面が判然とし保存も良くほぼ現位置に棲息していたものと思われる。江

口元起の同定によると、このサンゴはオノミチキサンゴ(*Dendrophyllia cribrata* (de Haan)) であり、現生種として知られているが(江口, 1935, YABE H. and EGUCHI M., 1944, 生物学御研究所, 1968), 化石としての産出は最初であることが判明した。現生のオノミチキサンゴの棲息は、日本周辺の造礁サンゴが消失した北側の岩・礫地帯で知られており、その深さは 10~100m の浅海である(江口, 1935)。

このオノミチキサンゴの産出は、深度が微化石分析による江戸川層群と上総層群の境界付近であること、また先述したように現生種の棲息環境が判明していることから当時の江戸川層群基底の堆積環境を知る手がかりとなること等から意義あるものと思う。

4. あとがき

微化石分析、試錐等による東京の第四紀層の調査結果については近い将来報告することとして、今回はオノミチキサンゴの化石産出の紹介にとどめた。

試錐を担当したダイヤコンサルタント K.K. の田村美乃、岩沢英明の両氏、写真撮影をしていただいた森雄二東京家政大学講師、発表の機会をいただいた倉持文雄東京都土木技術研究所長に感謝する。また、江口元起東京家政大学教授には化石の鑑定、その他折りにふれて御指導をいただき心から感謝する次第である。

文 献

- 江口元起 (1935), 東京湾及びその周辺のサンゴ, 植物, 動物, vol. 4, no. 2, p. 66, Fig. 1.
 生物学御研究所 (1968), 相模湾産ヒドロ珊瑚および石珊瑚類, p. C8, Pl. C2, Fig. 2, Pl. C21, Fig. 3, 4.
 YABE H. and EGUCHI, M. (1944), Note on a Fossil *Dendrophyllia* from the Miocene of the Tugaru District in Aomori-ken. *Jour. Geol. Soc. Japan*, vol. 51, p. 135—137.